HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 北駕文庫蔵書の伝来について ： 仏書からみた文庫の形成 |
| 著者 | 徳永，良次 |
| 引用 | 北海学園大学人文論集，6：A31-A42 |
| 発行日 | 1996-03-31 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 北駕文庫蔵書の伝来について
## ―仏書からみた文庫の形成―

徳永良次

## 一

文化というものを、言語と同じように通時的・共時的にみていくこととすれば、本稿は、通時的な調査・報告ということになる。

拙稿ですでに一部明らかにしたように、本学図書館の「北駕文庫」には優に三万点を超える蔵書が保管されている。[1] この「北駕文庫」に収蔵されている蔵書の大半は、私立北海中学の初代校長であった浅羽靖によって収集されたことが明らかになっている。[2] 浅羽靖は、当時の北海道の教育条件が整備されておらず、その結果として、そこに暮らす人々や、学校に通う学生がいかに「文」化されていないかを嘆いており、それを示す資料がいくつか残されている。以下に、その記録のいくつかを略出して示すこととする。ただし、略出部分はすべて原文のままである。

○北駕文庫設立趣意概要（北駕文庫蔵書畧目録）

「――略――北海道ハ我帝国紀元以来殆ンド三千年ニ垂ントスル古帝国北彊ノ一部分ナリト雖トモ人文未タ進マス従ッテ太タ国書ニ乏シク自カラ人民ノ性情ニ純厚ナラサルモノアリ多年ノ痛恨事トス此ヲ以テ先ツ我国ノ書類ヲ備フルヲ急トシ――以下略」

○北駕文庫設立趣意[3]

「――略――、国書経書を首とし、凡そ我国民として必読すべき内外の図書を此の文庫に聚め、之れを公開して広く世人の閲覧に供し、後進子弟をして忠孝廉恥の気風を高め、

――略――。」

○北駕文庫開設披露（「浅羽靖」153頁による）

「――略――この北駕文庫が北海道全部を刺激し、各地に図書館の設置せらるるに至らば靖の満足とする所なり、列強の間に立ちて競争せんには健全なる頭脳を要し、斯くせんことは健全なる図書を披読せざるべからず」

○書籍包紙書き入れ（「浅羽靖」155頁による）

「――略、北海道ニテ我帝国ノ古書ニ欠乏スルヤ久シ、其ハ国民ノ精神ハ未タ日本国民タルノ信念薄キヲ見ル、於此益々良書ヲ示シ、且ツ国民タルノ常識ヲ養ハサルヘカラス」

これらの記録を見ると、当時の日本の国情も反映して多分に国粋主義的であり、天皇を頂点とする中央集権的な文言が使用されてはいるが、一方において当時の北海道にいかに書籍が少なく、また自由に閲覧できるような施設がなかったかが知られるのである。

大正天皇が皇太子であった明治四十四年に、地方の一私立学校であった私立北海中学校に「行啓」することを契機として、北駕文庫が設立されたのであるが、設立当初の蔵書数は、およそ一万五千冊であったという。その後、大正三年に刊行された「記念北駕文庫蔵書畧目録　第一巻」には約三万冊という記録があるので、わずか三、四年のうちに倍増したことになる。

これらの図書が、どのような経路をたどって北駕文庫にもたらされたかについては必ずしも明らかになっていないが、次のような収集の経路が明らかとなっている。

1　浅羽靖本人の蔵書
2　寄贈本
3　寄託本
4　新規購入

右の経路は、北駕文庫を充実させるためにいかに当時の関係者が苦心を重ねたかを物語っている。このため現在の北駕文庫には北海道において頼を見ないほどの、歴史的価値のある蔵書が収集されており、中には全国的にみても極めて貴重な資料も所蔵されているのである。(4)

本稿では、共同研究のテーマの一つである「文化」という問題を、北海道の中の小さな私学の図書館であった北駕文庫が、

どこからどのように図書を収集していったかという面から考えていきたい。それは、当時「辺境」であった北海道、ないしはそこで暮らす人々の知識や教養をいかにして早く「本土」なみに引き上げることができるかという努力であり、挑戦の結果であると思われるからである。

## 二

北駕文庫の中で、筆者が三年ほど前から細々と調査を続けてきた分野に「宗教書之部」というものがある。これは、異なり数で約四百点、総数にすると七百点を優に超える膨大な蔵書数であり、しかもその内のかなりの書籍が江戸時代以前の写本や版本である。中には、日本の平安時代にあたる中国の宋版一切経の一部や、十六世紀中頃の刊行と考えられる朝鮮版の仏典などもあり、また、江戸時代の写本・版本にも珍しい資料が少なくない。

これらの資料の中で、北駕文庫の収書の状況を物語るものが散見される。例えば、前所蔵者を示す「印記」が押されてあったり、写本の場合には書写奥書に明記されていることがある。また、表紙に貼り紙があることで所蔵者が判明する場合もある。さらに、裏表紙の紙の貼り合わせの部分に数字や記号のような書き入れもあり、これによってある程度収書の経路が推定できることもある。これらとは別に、浅羽靖に宛てて書かれた手紙や、北駕文庫宛ての手紙や書類、各地の古書店からの伝票などからも経路を知ることができる部分もある。しかし、ほとんどの場合、前所蔵者の氏名などがわかる程度でそれ以上の情報を得ることは難しい。

ところが、調査していた「宗教書之部」の中の少なくない資料に、頻繁に同じような貼り紙があり、さらにそれに書き入れられた文字に一定の共通性のあることが判明した。そこで、北駕文庫本の表紙に付けられた分類ラベルの順に、その貼り紙のある書名（外題を基準とする）と冊数、そして貼り紙の文字と、書き入れの文字等について以下に示す。[6] 資料一覧の中で／は改行を示す。

74　選択集私記　五冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「盈」墨書

75　法華経入疏　十一冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「調」墨書

76　十門弁惑論纂述　四冊

78 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「水」墨書
説法明眼論鈔　二冊

80 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「調」墨書
教誡律儀講述　二冊

81 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「芬」墨書
輔行序竝註勘文　二冊

82 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「玉」墨書
法華疏序勘文　二冊

83 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「玉」墨書
善悪因果経要解　二冊

84 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「成」墨書
梵網註経　三冊

85 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「往」墨書
金剛経刊定記　五冊

117 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「為」墨書
六合釈節要　一冊

118 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「水」墨書
六物図　一冊

119 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「収」墨書
菩薩戒経義疏會本　二冊

120 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「往」墨書
頌義九十抜粋真言問答　一冊

123 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「列」墨書
浄土論註拾遺抄　四冊

124 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「玄」墨書、
但シ右傍ニ「黄」(朱筆)書入レアリ
記主禅師傳　一冊

125 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「往」墨書
勝宗十句義論　一冊

130 (表紙貼紙)「縁山／南塔／如意窟蔵」、「麗」墨書
科文称讃浄土佛摂受経　一冊

131 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「黄」墨書
源智上人選択要決　一冊

135 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「盈」墨書
科往生拾因　一冊

140 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「寒」墨書
教戒律儀　三冊

1-1 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「芬」墨書

1-2 (表紙貼紙)「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「芬」墨書
(表紙)「増秀」(墨書)

-3 （表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「芬」墨書

142 往生拾因　二冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「寅（ママ）」墨書
（表紙）「黄」（白書）

147 教誡儀指要鈔　一冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「秋」墨書

148 百法問答抄玄談　一冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「生」墨書

174 識知浄土論并附録　二冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「宿」墨書

177 五部九巻要文　二蔵二教略頌　合帙　一冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「洪」墨書
（表紙）「文政九戌年正月吉祥日　宝聚庵」（朱書）

178 正邪不可會弁　一冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「閏」墨書

179 倶舎論頌疏正文　一冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「菜」墨書

192 頌義六抜萃　二冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「列」墨書
（表紙）「十」（朱書）

198 批判附十八通　三冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「張」墨書

201 父子相迎要解　二冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「張」墨書

203 往生礼讃纂釈　五冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「洪」墨書

205 如来秘蔵録　一冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「暑」墨書
（表紙）「五十六」（朱書）

207 有宗七十五法記　三冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「重」墨書
（表紙）「往」（墨書）

216 教観綱宗會本　二冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「崑」墨書

220 無量壽経義疏　一冊
（表紙貼紙）「縁山／南塔／如意窟蔵」、「天」墨書

222 諫母草　一冊
（表紙貼紙）「縁山／塔下／二念菴蔵書」、「秋」墨書

右にあげた資料はすべて江戸時代の写本・刊本である。最も

古いもので85の「金剛経刊定記」であり、中国（清）の年号で崇禎丁丑（1637）の刊記を持つ刊本がある。日本で刊行されたものでも、江戸時代初期の寛永廿年（1643）の刊記を持つ120の「頌義九十抜粋」などがあり、新しい方では天保七年（1836）の刊記を持つ124の「記主禅師傳」などがあり、これらだけでほぼ江戸時代全般にわたっていることがわかる。

さて、これらの資料に貼られている貼り紙には、74～76のように「縁山／南塔／如意窟蔵」と記された貼り紙のものと、78、80、81のように「縁山／塔下／二念菴蔵書」という貼り紙が貼られたものとに分類できる。つまり、「縁山」というところまでは共通であるが、さらに細かく言えば「如意窟」であるか、「二念菴」であるかに所蔵が分かれるのである。

「縁山」とは、現在の東京都港区にある、浄土宗の大本山である増上寺のことであるのは疑いない。増上寺は別名「三縁山広度院」ともいい、「三縁山」から「縁山」とも称されるようである。「国史大辞典」などによると、増上寺はもと光明寺と称する真言寺院であったが、明徳四年（1393）に浄土宗に改宗して増上寺と改めた。同寺が最も栄えたのは、やはり江戸時代に徳川家の菩提所となってからであろう。徳川家康は増上寺に対して慶長年間に多大の援助をし、大伽藍の完成、寺領一千石の安堵、宋・元・高麗版の大蔵経を寄進するなどして繁栄を極めた。江戸時代の記録については、北駕文庫にも収められている増上寺の記録である「三縁山志」に詳しく記されている。

如意窟については、北駕文庫本のどれをみても記録がなく詳細は不明であるが、二念菴は、188の「施食盆供弁誤　一冊」の刊記に次のようにある。

［文政］丁亥（1827）季夏　縁山僧某志／二念庵蔵版

これは、縁山の僧侶が記した「施食盆供弁誤」という本が二念菴にあり、それをどこかの市中の版元が開版したものか、二念菴の中で印刷されたのかわからないが、二念菴が確かに存在していたということだけは証明てきる確実な資料となる。

## 三

次に北駕文庫本の表紙貼り紙に墨書された文字について検討する。結論を先に記せば、これは増上寺のそれぞれの坊において所蔵されていた資料の所在を示すしるしであると考えられる。例えば、74の「選択集私記　五冊」は、表紙貼紙に「縁山／

南塔／如意窟蔵」の貼紙があり、「盈」の字が墨書されている。これは、増上寺の「如意窟」という坊の中の「盈」と記された経函に収められるべき典籍であるということを示している。75の「法華経入疏　十一冊」も同様である（表紙貼紙「縁山／南塔／如意窟蔵」、「調」墨書）。

一方の、78「説法明眼論鈔　二冊」も如意窟と原理は同様であり、表紙貼紙にある「縁山／塔下／二念菴蔵書」の通り、「二念菴」という坊中の「調」の経函に収められていたものであると考えられる。

貼り紙に墨書された「盈」や「調」の字が、それを記した典籍の固有の記号である可能性（一字一典籍）はない。なぜなら、後述の「千字文」一覧の通り、76の「十門弁惑論纂述　四冊」と117の「六合釈節要　一冊」は、共に表紙の貼紙は「縁山／南塔／如意窟蔵」であって、かつ「水」と墨書されているからである。一方の「二念菴」と記された資料群においても同様の例を見つけることができる。

要するに、どちらの坊にも相当数の経函があり、その中には複数の典籍が収められていたことが分かる。

では、これらの貼り紙に記された文字――経函の文字――は、何らかの意味があるものであろうか。

これは、膨大な数の典籍、またそれを収めた経函を容易に検索・発見するための工夫であり、古くから僧俗を問わず知られていた「千字文」の漢字の配列に従っていることは明らかである。「千字文」は、中国の小学書であり、四文字を一句とした二五〇句計一千字からなる四言古詩であり、南朝梁の周興嗣奉勅撰にかかるものである。「天地玄黄」で始まり、「焉哉乎也」で終わり、一字の重複もなく、しかもその中に自然現象から人倫道徳に至る知識用語を収録し、子弟の教養・習字のために用いられた。日本には、相当古く伝えられたらしく、「日本書紀」や「古事記」に、和邇（ワニと読む。王仁とも書く）が論語とともに千字文を百済から将来したという記録がある。ただし、それは現在伝えられている周興嗣の作より以前の、別の千字文であるという説が一般的である。[7] 千字文を経函などの整理をするための「記号」として使用した寺院は、神奈川県の「金沢文庫」（称名寺）にも例があり、決して珍しいことではない。

ここで、北駕文庫本に記されている千字文の文字が、「如意窟」と「二念菴」の二坊に分けてどの程度まで使用されているかを見てみようと思う。左に千字文の始めから六十四文字までをあげる。中の漢字を、○で囲んであるのは旧「如意窟」蔵本を示し、◎は同じ漢字を墨書した資料が複数あることを示す。

**旧「如意窟」蔵本に付された墨書**

天地玄黄宇宙洪荒
日月盈昃辰宿列張
寒來暑往秋収冬蔵
閏餘成歳律呂調陽
雲騰致雨露結為霜
金生麗水玉出崑岡
剣号巨闕珠称夜光
果珍李奈菜重芥薑

同様に、「二念菴」蔵本についても千字文と対応させてみる。左の□で囲んである文字は旧「二念菴」蔵本を示し、□は複数あることを示している。

**旧「二念菴」蔵本に付された墨書**

天地玄[黄]宇宙[洪]荒
日月[盈]昃辰宿[列]張
[寒]來[暑][往]秋収冬蔵
[閏]餘成歳律呂[調]陽
雲騰致雨露結[為]霜
金生麗水[玉]出[崑]岡
剣号巨闕珠称夜光
果珍李奈[菜][重]芥薑

さて、これらをみると、「如意窟」の方は北駕文庫の蔵本で知られる限りでは、「水」まで経函があった(44函)ことがわかる。また、「二念菴」については、「重」まであるので62函まで数えることができる。[8]

実は、前章にあげた以外に、表紙の貼り紙は剝離してしまっているが、墨書ないしは別の紙で漢字一文字を記した資料がある。今、それを示すと次のようなものがあげられる。

79　首書十八通　二冊
(表紙)「誠」(墨書)

139　浄土略名目図見聞(内題)　三冊
1(表紙)「鏡」(墨書)

（裏表紙）「転法輪阿」（墨書）
-2（表紙）「寮」（墨書）
（裏表紙）「順誉永之」（墨書）
-3（表紙）「典」（墨書）
（裏表紙）「登／転法輪阿」（墨書）
180 唯識本頌（題箋剝離）　一冊
（表紙）「洪」（墨書）
218 観心要決　一冊
（表紙）「来」（貼紙）、「潤」（白書）

右の六冊は、千字文と対比させるとどのようになるか見てみると、

79 「誠」→147文字目
139—1 「鏡」→なし
—2 「寮」→なし
—3 「典」→236文字目
180 「洪」→7文字目
218 「来」→10文字目
「潤」→なし、ただし「閏」は13文字目

となり、79と139（1～3）の四点は、別の意味を持ったものである可能性が高い。なぜなら、如意窟と二念菴の両方の千字文とも60程度の文字しか使用していないからである。それに対して、180と218の二点は「縁山」関係の典籍であった可能性がある。180は明らかに題箋が剝離した形跡があり、その後に臨時の措置として表紙に直接墨書したと考えられる。218は新たに「来」の字だけを墨書した貼り紙を表紙に貼っており、また「潤」の字を白書している。これらは、既に貼ってあった貼り紙が剝離してしまった際の応急処置としてよく使われるやり方である。

## 四

以上、現段階までの不十分な調査であるが、北駕文庫に収蔵されている仏典の内、前章までに述べてきた貼り紙のある典籍は、増上寺から伝来してきたものであることが明らかとなった。この一連の典籍がいつ、どのような形で北駕文庫にもたらされたかについては、まだ明らかにしえない。恐らくは、増上寺関係の典籍は一括されていたであろうし（そうでなければ、このようにまとまった形で遠く離れた北海道に伝来することはない）、たぶん東京の古書店などを通して北駕文庫の関係者が購入

したものであると考えられる。

あるまとまった数の典籍が、本来あった場所（寺院など）から、よそへ移るということは、古くからさまざまな形で存在している。

たとえば、京都・高山寺には中川成身院本と称される典籍が収められているが、これらは中川成身院の実範の関係した本を高野山月上院の玄證阿闍梨が伝領し、勧修寺を経て、明恵の弟子の定真、仁真らによって高山寺へもたらされたと推定されている。(9)

また、同じく京都の洛南にある真言宗小野流の大本山である随心院には、表紙に四国の善通寺と墨書された典籍が存在する。これは、江戸時代末期から明治にかけて随心院の管長門跡として勤めた旭雅和尚によって伝来したものであると考えられている。(10) これ以外に、公共の図書館や、民間の博物館・図書館などにも有名な社寺から流れ込んだ典籍が相当数あることも周知の通りである。

北駕文庫に収蔵されている増上寺関係の典籍においても、増上寺から坊外にでたものが一括して、おそらくは東京の古書店を通して、もたらされたものであろう。北駕文庫の創設者の浅羽靖はしばしは東京の古書店を通じて図書を収集していた記録が残されているし、北駕文庫の館員も同様に収集の努力を続けたという。特に、ある程度図書が充実した段階で木版本の収集に努めたとも言われているので、(11) その段階で伝来したのかもしれない。

以上、北駕文庫に増上寺関係典籍が伝来した事実について調査した結果を述べた。しかし、いまだ全貌については明らかにしえていないし、いまも残る関係者の記録や手紙類などはほとんど未解明のまま残されている。今後、北駕文庫が改装終了次第精査し報告したいと思う。

注

1　徳永良次「北駕文庫蔵『鴨長明方丈記異本』」（北海学園大学人文論集1　1993）

――――

「北駕文庫蔵書目録稿―「宗教書之部」の古写本・古刊本（一）―」（北海学園大学人文論集4　1995）

2　中嶋健一「浅羽靖」（北海学園―非売品―　1969）による。また、明治以降の北海道における教育機関の発展をまとめたものとして、札幌市教育委員会「北都の私学」（さっぽろ文庫71　北海道新聞社　1994）などがあり、当時の北海道におけ

る教育とその機関の現状を知ることができる。

3　この趣意書は、注2文献を参照させていただいたもので、筆者未見である。以下、この文庫の収書の概要については、右の文献から多くの知見を得たことを一言しておく。

4　注1の拙稿において若干紹介したが、まだ多くの貴重書が収蔵されている。今後、機会を見て紹介していきたい。

5　拙稿注1論文による

6　北駕文庫は1995年の夏あたりから大規模な改修整理の事業に着手され、現在も続けられている。改修途中に一度北駕文庫に入ることができたが、以前の本の配列を大きく変更しており、容易に閲覧したい資料を検索するのが困難な状況にあった。また、大規模な整理を行っている途上でもあり、そこに調査に入ることは改修・整理の妨げにもなるのではないかと判断して、充分な追加・点検のための調査をしばらくは中断することにした。従って、本稿の調査は、資料の全体像を示すものではないことを一言しておく。

7　千字文についての内容は、「日本国語大辞典」（小学館）により、その他「三體千字文」（秀峰堂）などの文献も参考にした。

8　注6で述べたとおり、調査は不十分であり、これ以外にも増上寺旧蔵本であるものは北駕文庫に存在している可能性が大きい。従って、さらに多くの経函があったかもしれない。この点に関してはさらに調査を進めていきたい。また、前出の一覧にある資料で、分類番号80と140の資料には「二念菴」の蔵書であることを示す貼り紙と、「芬」の字が書き入れられているが、千字文に「芬」の文字は見当たらない。可能性としては63文字目の「芥」と考えられるが、もしそうであるとすると、「二念菴」の経函は63函まで数えることができる。

9

土宜成雄「玄證阿闍梨の研究」（桑名文星堂　1943）
築島　裕「中川成身院本について」（高山寺典籍文書の研究　1980）
松本光隆「高山寺経蔵覚成本について」（昭和五十九年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集　1985）
徳永良次「康治元季十一月六日記について」（平成三年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集　1992）
――――
「高山寺蔵「不動指事　私」について」（平成四年度　高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集　1993）
――――
「高山寺蔵「烏蒭澁摩事」について（一）」（平成六年度　高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論

集　1995)

10　随心院聖教類綜合調査団編「随心院聖教類の研究（花野憲道師担当)」(汲古書院　1995)

11　注2文献154頁。また、最近京都でたまたま「京都古書店案内図」というものを目にした。その表紙には本稿で述べた増上寺関係の貼り紙とまったく同じ体裁の貼り紙をデザインしているものを使用していた。そうしてみると、古書の世界では増上寺関係の典籍は相当広く流布している可能性が考えられる。ちなみに「京都古書店案内図」の表紙に印刷してあったのは「三縁山／三中溪／清涼室蔵」というもので「張」の墨書と考えられる書き入れのあるもので、本稿で述べたものとは別の所蔵であったことがわかる。